



さくらファーム乾田直播栽培ほ場の様子

令和8年度 第1回普及活動検討会

プロジェクト課題No.4

大区画化に対応した 水稻乾田直播栽培の定着

大河原農業改良普及センター

計画期間: 令和8年度～令和10年度

対象者: 農事組合法人さくらファーム
農事組合法人Nature

チーム員: ◎田村、遠藤、高橋

伊藤(和)、熊田、石垣

1. 課題の背景

仙南地域における土地利用型(水稻)経営体の課題

- ・農業者の高齢化に伴う担い手の減少
- ・担い手への農地の集積 → 急激な規模拡大

課題に対応するためには…

- ・省力化
 - ・作業時期の分散
- が必要

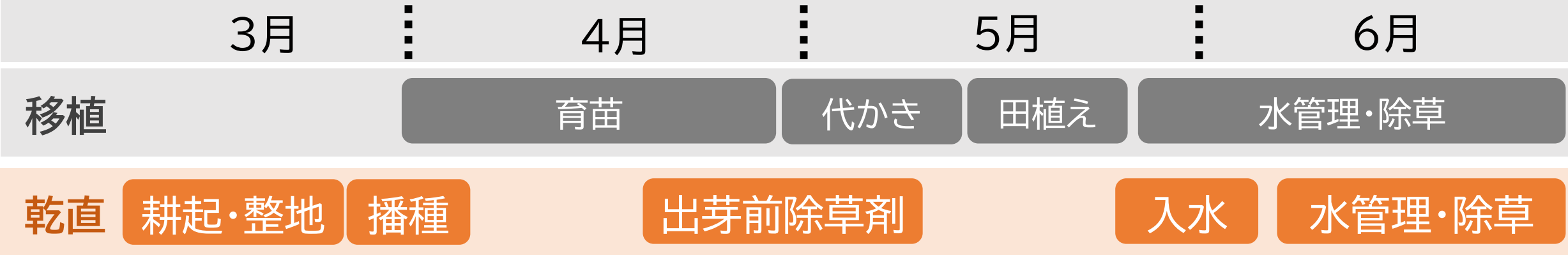
- ・県内他地域より乾田直播の取組みが少ない

**大区画ほ場を有効活用するための
乾田直播栽培技術の定着が必要**

1. 課題の背景

	移植栽培	乾田直播栽培
作業体系	代かきしたほ場に苗を移植	乾いたほ場に直接播種
メリット	初期生育、収量が安定しやすい 雑草リスクが低い	育苗・代かき・田植えが不要 春作業の分散が可能
デメリット	5月に作業が集中 育苗・田植えの労力が大きい	初期生育、収量が移植と比較して不安定 雑草防除が難しい

移植栽培・乾田直播栽培の作業フロー



2. 対象者の概要

農事組合法人さくらファーム

角田市 高田萱場地区

水稲作付面積:16ha

(うち乾直8ha)

1～2ha/筆の大区画ほ場

乾田直播栽培に取り組むのは
今年度が初めて

令和9年度以降には
全体で36.5haが受け渡される

農事組合法人Nature

村田町 沼田関場地区

水稲作付面積:25ha

(うち乾直3ha)

30～50a/筆の中区画ほ場

10年前から乾田直播栽培に
取り組んでいる

令和11年頃から大区画ほ場での
乾田直播栽培を予定

2. 対象者の概要

6/16撮影



さくらファームほ場の空撮画像

3. 活動目標と活動事項

定性的目標

- ・ 基本的な栽培方法で乾田直播栽培を行うことができる
- ・ 乾田直播に取り組む生産者同士で情報共有が行われる

定量的数値目標

仙南地域の水稲の移植栽培における平均収量の80%(388kg/10a)
を達成したほ場の割合

	R7(現状)	R8	R9	R10
目標	50%	50%	60%	70%

※平均収量の80%を達成したほ場の数 / 乾田直播栽培を実施したほ場の総数

3. 活動目標と活動事項

活動事項

①乾田直播技術向上支援



栽培管理の打ち合わせ

②情報共有支援



検討会後の生産者同士の情報交換

4. 活動状況

①乾田直播技術向上支援

排水対策

砕土・整地

播種

除草剤散布

フラッシング

出芽

入水

4/2

4/6

4/15

5/7

5/12

5/25

6/4



4. 活動状況

○ 2種類の播種機で作業性や生育を比較

グレーンドリル



スリップローラーシーダー



	グレーンドリル	スリップローラーシーダー
メリット	高速作業が可能 播種深度が安定	4工程同時作業 ほ場が乾ききらなくても作業可能
作業性	7-10km/hで作業	2-3km/hで作業 追加で鎮圧が必要か
稲の生育	出芽がそろろう	出芽がばらつく



次年度以降の作業体系を検討中

4. 活動状況

○乾田期の問題点の振り返り

作業や生育の課題と次年度以降の対策を検討

〔役員から〕

- ・フラッシングのタイミングが良かった
- ・並行してやっている湛水直播より状態が良い

○農作業安全に向けた話し合い・ワークショップ

草刈り作業の安全面および作業効率について
課題や良かった点を話し合い、専門家の助言を受けた

〔役員から〕

- ・当日の作業動画を見て振り返ることで課題を共有できた
- ・次回に向けての対策を話し合うことができた



4. 活動状況

8/17撮影



さくらファームほ場の空撮画像

4. 活動状況

②情報共有支援

○農業振興部主催の水稲栽培塾

- ・Natureのほ場で7月に現地検討を実施
- ・乾直の導入を希望する生産者との交流

○全農みやぎ主催の現地検討会

- ・さくらファームのほ場で4、5、7月に開催
- ・さくらファーム、Natureのほかに乾直に取り組む生産者と情報交換



生産者間のつながりが作られつつあり、
情報交換が始まっている



5. 今後に向けて

①栽培管理のための技術支援

- ・刈り取り適期の指導、収量調査
- ・今作の反省会の開催
→ 来年度の計画「目標は3月播種」
- ・来作に向けたほ場づくり
(土づくり・排水対策)

②生産者間の情報共有支援

- 乾田直播勉強会の開催
対象: 2法人 + 他生産者や導入希望者
- ・今年の生育の振り返り
 - ・基本的な技術の習得
(乾田期の作業タイミング)
 - ・農業者間の情報交流の促進



農業者自らの判断で適期作業ができるように